



かめだせいじ
亀田誠治さん

1964年アメリカ ニューヨーク生まれ。音楽プロデューサー、ベーシスト。椎名林檎、スピッツ、GLAY、石川さゆりら、数多くのアレンジを手がける。2004年に椎名林檎らと「東京事変」を結成。2007年、2015年に、日本レコード大賞編曲賞、2021年に日本アカデミー賞優秀音楽賞を受賞。ほか舞台音楽など活動は多岐にわたる。2019年から、フリー（無料）で誰もが参加できるボーダーレスなイベント「日比谷音楽祭」の実行委員長を務める。

宮川さん 口笛吹いて譜面書いて、「時間だ」というと車でお連れの人が迎えに来て、数十分後にはテレビの音楽番組に出ている。誰にでもできることではないですし、憧れましたね。自分もやってみたいと思ってなんとか音楽の仕事にはこぎつけたのですが、父にはいつも「彬良、お前の譜面はすごいんだけど、メロディーに歌心がない」とくり返し言われて。どうしたらいいんだろうと悩みましたね。

亀田さん 彬良さんでもそういう時代があったんですね。

宮川さん それがある時、ふと、お袋が「ねんねんころりよ」って歌ってくれた子守唄を思い出して「あ、こういう曲をつくれればいいのかな」という天啓みたいなものを受けたんですよ。

亀田さん 僕も子守唄、覚えています。うちはシューベルトの子守唄のメロディーだったのですが、歌詞が「誠治はいい子です、誠治はいい子です〜」って無限ループで（笑）

宮川さん 歌心って誰もが自分の中に持っているメロディーで、これを聞くと自然に心が動かされるみたいなものなのかな、ということに気づいたんですね。勉強してきた音楽と生まれた頃から体の中にある音楽とが、ここで握手できたという感じでした。

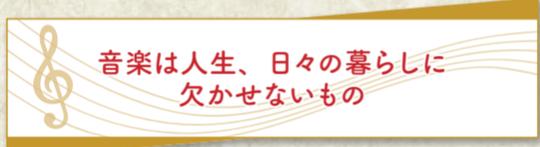
区長 亀田さんは「FM亀田」というラジオ放送局をやっていたそうですね。

亀田さん はい、自分の部屋につくった架空放送局です。選曲、DJ、そしてリスナーも自分。「FM亀田・DJ亀田誠治様」と書いたリクエストはがきを毎週自分宛てに送っていました。

宮川さん すごいな（笑）何歳頃の話ですか？

亀田さん 小学6年生から高校2年生、彼女ができるまで毎週放送していました。もともとは在日米軍が発信するラジオに夢中になって、アメリカのヒットチャート American Top 40のハードリスナーでした。ロック、R&B、ソウルもあればディスコもあって、もうめちゃくちゃカッコいい。ところが自分のあまり好きではない曲がずっと1位なのが悔しく思えてきて、それなら自分のオリジナルチャートをつくって放送しよう。この頃から、どんな形でもいいから音楽に関わりたいと、強く思うようになりました。そのときに吸い込んだジャンル

を超えた音楽のエキスが、今の自分をつくっていますね。



区長 音楽というのは人を楽しい気持ちにさせたり、生命力を喚起させたり、あるいは躍動をつくり出す素晴らしい役割があるのではないかと思います。音楽はどんな力を持っているとお考えですか。

宮川さん 音楽ってすごく大切なもの。自分にとってはもはや趣味、趣向とか、そういった次元では語れないものです。みんなが音楽だと思っているものは、音楽ビジネスだったりするじゃないですか。でも、朝起きて「おはよう」という気分や食事をするときの箸の上げ下ろしがもう音楽で。人生、日々の暮らしにすごく必要なものに違いないと思っています。

亀田さん 賛成ですね。生きてると様々な場面で音楽に救われることがありますし、音楽を聴いてわけもなく涙が出てきてしまったり。また、僕はベースプレーヤーでもあるので、楽器を奏でる喜び、合奏して響き合ったときの感動。そうした心を揺さぶられる経験をさせてくれる音楽は、日々欠かせないものだと感じています。

宮川さん 例えば合唱では、それぞれのパートが全部よいメロディーになるよう、僕らはがんばって作曲や編曲をするんですよ。そしてなおかつ、全部の音が同時に鳴ってもぶつからず、ハーモニーを奏でる。この調和ということ、人間はどうして見習わないのかなと思いますね。

区長 戦わないということですよ。

亀田さん 戦わない、戦争しない。ぶつかっている音は気持ちが悪いし、気持ちが悪いのでぶつからないように工夫しますね。

宮川さん それからこれは僕の妻（ヴァイオリニスト）の意見なのですが、どうしてコンサートの入場料はこんなに高いのかと。オペラなんか特に高額ですが、これでは「お金のある人だけが来てくれればいいよ」みたいに思えてくるじゃないですか。音楽の本来あるべき姿とは違うのではないかと、話をしているんです。

区長 亀田さんが力を入れていらっしゃる「日比谷音楽祭」は、参加費も入場料も無料でしたね。

宮川さん どんな運営の仕方をされているのか、ぜひお話を聞きたいですね。

亀田さん 日比谷公園一帯を会場に、「親子孫三世代、誰もが楽しめるフリーでボーダーレスな音楽祭」ということで開催しています。とにかく多くの人に音楽に触れてほしい、音楽を体験してほしいというのが開催の思いですね。インターネットが発達し、今様々な形で音楽に触れることはできますが、じかに生演奏や楽器に触れる「体験」こそが大切だと思っています。

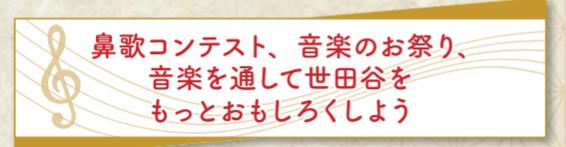
区長 壁を低くするために無料と。

亀田さん 海外に行くとかライブやコンサートって本当にたくさんあるんですよ。まちの至る所から音楽が聴こえてきて、無料で聴けるもの、チケットを買って聴くもの、音楽に触れるたくさんの機会があります。

区長 音楽が、ごく一部の人だけに開かれているものではないということですね。

亀田さん 音楽ってどこにでもスッと入っていて、人と人をつなぐような力があるでしょ。コロナ禍でソーシャルディスタンスという言葉が出てきて、人と人の距離、なかでも心の距離が遠

くなってしまった気がします。だから今こそ、人と人の心を音楽でつないでいきたいという思いが強くなりました。誰もが参加できる音楽のサンクチュアリのような場として、日比谷音楽祭をこれからも続けていきたいと改めて思っています。



区長 日比谷音楽祭のお話が出たところで、音楽を通して世田谷をもっとおもしろくするにはどんなアイデアがあるのでしょうか。

宮川さん 僕はせたがや文化財団音楽事業部でいろいろな企画をやらせていただいているのですが、一つ、やりたいのになかなか実現していない企画があるんです。

亀田さん 何ですか？

宮川さん それは鼻歌コンテストなんです。

区長・亀田さん 鼻歌！？（笑）

宮川さん 笑わないでくださいよ、本気なんですから（笑）昔うちの子どもが「カギ、ガチャンガチャン」って勝手なリズムをつけて歌っていたのをよく覚えているのですが、赤ちゃんや小さい子どもが、自分でリズムやメロディーをつけて歌っていることってあるでしょう。そういうのをうまく録音して、表彰するというのをやりたいんです。

区長 せたがや鼻歌コンテスト（笑）

宮川さん 替え歌とか、メロディーとか、自然に出てくるのがもう作曲家、音楽家なんですってことに気づかせちゃう、みたいな。子どもに限る方がいいと思うんですけどね、お父さんが酔っ払って鼻歌っていうのはちょっと置いておいて（笑）

区長 表彰されたことがきっかけで、未来の作曲家が生まれるかもしれませんね（笑）

亀田さん 僕は年に1回、1日でもいいので、誰もが音楽を自由にやっていいお祭りみたいな日があるといいなと思います。太鼓を叩く人もいれば、笛を吹く人もいたり、鼻歌を歌っている子もいたりして、やかましいとか言わないで、とにかく自由に音を出せる日がある。このごろ、僕は「ピースオブマインド」という言葉を使うのですが、心の平安ってやっぱりすごく大事で、その心の平安をつくってくれるものの一つが音楽ではないかと思うんですね。

宮川さん すごく素敵な考えですね。

区長 昨年、世界へ目を向けると、ウクライナでの戦火など悲しいニュースもありました。だから改めて、世界の平和や心の平安に貢献する音楽の力というものを、お二人のお話を伺って感じました。今年もよろしく願います。本日はありがとうございました。

宮川さん・亀田さん ありがとうございました。

